

都市の境界的空間と文化の革新，創造

— 浅草の文化人類学的研究 —

斗 鬼 正 一*

はじめに

浅草は、地理的には江戸・東京のはずれで、江戸時代は浅草寺の先は田園地帯だし、近現代においても、山手線からはずれ、副都心ともみなされておらず、後背地は北関東の農村地帯である。

他方で浅草は、文献上の初出が『吾妻鏡』で、1181（養和元）年鎌倉鶴岡若宮造営のため、浅草の大工を招いたとある。15世紀の『北国紀行』にも鳥越は海辺の村という記載があるが（台東区、1997）、そもそも浅草寺開創は推古天皇の時代といわれ、江戸開府のはるか前から存在する江戸・東京で最も古い街である。

さらに江戸時代になると、はずれでありながら、芝居町、吉原遊郭、浅草寺門前町は、江戸文化の発信地として賑わった。明治以降も、関東大震災で銀座にその座を奪われるまで、日本一の盛り場として新しい文化を創造し、全国に発信し続け、「仙台浅草」「鹿児島六区街」など各地に「うつし地名」が広がるほど、その名を轟かせる街であり続けてきた。

戦後、都心、副都心の興隆につれて斜陽化していたが、近年つくばエクスプレス、東京スカイツリーの開業で再び活況を取り戻している。

そこで本稿は、浅草という街が地理的にははずれにありながら、なぜ文化を革新、創造、発信し、江戸・東京という都市や人々を活性化し続けてきたのかを検討することを目的とする。

第1章では江戸、第2章では東京における浅草の文化革新、創造、発信を振り返り、第3章ではまず浅草の境界的空間としての地理的条件を検討する。ついで第4章では鬼門という最前線として、第5章では死、性、犯罪、廃棄物等の穢れの排除先として、第6章では、被差別民、細民の排除先として、第7章は異界、他界との境界としての浅草を検討する。これによって、いかに人々がカオスを排除して、コスモスとしての江戸・東京の都市空間を作り上げながら、他方で、浅草という街を舞台に、カオスへと接近し、活力、生命力を回復し、文化の革新、創造、発信を可能にしてきたのかを考察していくこととする。

第1章 江戸の文化革新，創造，発信の街・浅草

I. 盛り場

近世の盛り場とは、人がたくさん集まってくる場所ではあるが、今日のような大きな店舗が並ぶような街ではなく、施設は仮設で、大道芸、占いなど、施設を持たない者たちが営業する街であった（藤田、2003）。

浅草の場合も、開帳のメッカである浅草寺は、各地の有名寺院の江戸開帳の場として、話題と人出を呼んだ。また浅草寺境内も、多くの大道芸人などが独創的な芸で活躍する場となった。

たとえば松井源水は、4代目が富山から江戸に出て、霊薬反魂丹の宣伝販売のために、枕返し、居合抜きなどの曲芸を演じ、享保（1716-36）ごろになると、曲独楽も演ずるようになり、将軍家

2012年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科教授 都市人類学

重の浅草寺参詣のおりには上覧に供して御成御用の符を拝領するほどであった。深井志道軒は、葎簀張りの高床を設け、軍書から源氏物語、徒然草まで、破礼講釈、狂講で評判となり、宝暦年間(1751-64)には歌舞伎の大立者二代目市川团十郎と人気を二分、平賀源内の『風流志道軒伝』(1763)の主人公ともなっている(宇田, 1994)。
あずまけ、しのすけ
 東 芥子之助も、明和・安永(1764-81)ごろ、豆と徳利を使った芸、手品で人気があったし、江戸後期の長井兵助は、歯磨きや陣中膏墓の油の客寄せの居合抜きで評判となり、子孫は明治の初めまで5代以上同じ芸を続けたという。

II. 芝居町

江戸時代、役者は河原乞食という被差別身分とされ、芝居町も悪所とされてきたが、1842(天保13)年には团十郎が本物の武具を芝居に用いたのは贅沢、僭上のふるまいとの罪で、江戸十里四方追放を申し渡され、同年さらに、堺町、葎屋町、木挽町にあった芝居小屋を、田圃の真ん中の浅草聖天町(現浅草6丁目)に強制移転させ、猿若町と改称した。守田座が都心に進出したのは明治維新後の1872(明治5)年であり、それまで猿若町は、江戸三座と呼ばれた中村座、市村座、森田座が、新機軸を次々繰り出し、新しい流行を発信する街として大いに繁栄した。

役者が身分の別を忘れて、市中で町家の者達と立ち交わることは好ましくないこと、芝居の内容が卑猥で、市中の風俗を乱していること、芝居が派手な流行の元凶になっていることという理由で、江戸のはずれに強制移転させられ(竹内, 2000)、俗界から隔てられた芝居は、幕府の思惑とは逆に、より一層、江戸の文化を革新する、流行の発信地、秩序を揺るがす危険なカオスの場=悪所になったのである(沖浦, 2006)。

III. 吉原遊郭

遊郭は当初海に近く、葎の茂る、現中央区日本橋人形町の低湿地を埋め立てて設けられ、悪しを吉しに変えるとして吉原と名付けられた。しかし、都市の拡大とともに、都心至近となり、大名屋敷

まで隣接するようになっていた。そのような中で吉原は、1656(明暦2)年、幕府によって市街地をはずれた浅草田圃の真ん中に移転させられ、浅草新吉原となった(尾河, 2000)。

吉原は江戸市中最大級の盛り場として賑わい、遊女屋で身分の高い遊女と遊ぶには、引手茶屋に遊女を呼んで宴席を設け、その後、茶屋男の案内で登楼するから、茶屋、料理屋、見世と、さまざまな業種が繁盛し、一日に千両落ちるのは、江戸でも日本橋、芝居町そして吉原だけといわれたほどだった。

さらに、遊女たちの髻、衣装などが、新しいファッショントレンドとして広まったり、男女間の出来事などが洒落本をはじめ、歌舞伎、音曲、浮世絵などの主題に数多く取り上げられたりして、その文化、風俗は江戸の流行の情報発信源となっていた。

こうして吉原は、明治以降も、1957(昭和32)年に売春防止法が施行されるまで340年もの間、繁栄が続いた。幕府は自ら公認した吉原遊廓を江戸のはずれに追いやったが、芝居町同様に、人々が非日常の世界をそこに見出す、秩序を揺るがす危険なカオスの場=悪所になっていたのである。

IV. 美人とファッション

鈴木春信は従来の浮世絵を錦絵に美しく革新、1769(明和6)年頃描いた「明和三美人」が江戸の街の評判となった。その一人、笠森お仙の茶屋は谷中であるが、いちょう娘と呼ばれた柳屋お藤は浅草観音堂後ろの銀杏下の楊枝屋柳屋の娘である。大田南畝は『お仙お藤優劣弁』の中で「用事(楊枝)ないのに用事をつくり、今日も朝から二度三度」とお藤の店に群がる人々の様子を描いている。堺屋おそでも浅草寺表参道の水茶屋の茶汲み女である。

1793(寛政5)年頃には、「寛政三美人」が評判となった。難波屋おきたは1795(安永7)年生まれ、浅草観音隨身門わきの水茶屋の看板娘で、喜多川歌麿らによって錦絵に描かれ、評判となった。おきたの評判で浅草寺境内の水茶屋はどこもとももとよひな繁盛したといわれる。富本豊雛は吉原の玉村屋抱

えの芸者で、富本節の名取である。もう一人の高島屋おひさは浅草ではないが、両国薬研堀米沢町2丁目の煎餅屋高島屋長兵衛の長女で、自家が経営する水茶屋で働いており、17歳の頃、喜多川歌麿の美人画のモデルとなって有名になっている。

こうした評判娘は、今日でいうファッションリーダーであり、錦絵は飛ぶように売れ、髪型、アクセサリー、着物などの流行情報が発信され、人々の間に広まっていったし、髪結いという職業もこの影響で始まったものである（NHK, 1999）。

また、江戸初の貸衣装屋も浅草で、5代將軍綱吉の元禄年間（1688-1704）に登場している。

第2章 東京の文化革新、創造、発信の街・浅草

I. 盛り場

1873（明治6）年、太政官布達で浅草寺境内は近代公園に指定され、国家の管理下に置かれたが、浅草は江戸以来の盛り場の要素を受け継ぎ、新たな盛り場となった。

とりわけ六区は、低湿地を造成して作られたが、奥山の見世物空間に代わって近代的興業街となり、芝居町の伝統を引き継いだ映画街、パノラマ、水族館といったそれまで存在しなかった新しい見世物が登場した。

他方でひょうたん池には茶屋が並び、私娼窟、銘酒屋街など伝統的盛り場の要素も引き継いで、意馬心猿（欲情で心が惑う）街として大いに栄えた。

また江戸時代の隅田川は、浅草寺から下流が禁漁区だったが、明治になって解除となり、船遊びを兼ねた投網舟が人気となった。

II. 異文化の導入

キリスト教

江戸で初の南蛮寺、すなわちキリスト教会は、1599（慶長4）年、フランシスコ会ジェロニモによって浅草に建設された記録があるという（武蔵, 2004）。

また明治になると、浅草にはサン・フランシス

コ派教会とライ病院が建てられている（小木, 1991）。

革靴

明治の文明開化で入ってきた洋靴の製造に、すぐさま取り組んだのが浅草の弾直衛門、後の弾直樹である。弾は非人頭とされ、皮革製品製造の権利を与えられていたが、明治政府はその職務を取り上げた。それに対し弾直樹は欧米式軍隊の導入で新たに必要とされた軍靴の製造を着想、生き残りをかけた。

結局弾は会社設立に失敗したものの、和歌山藩、築地で伊勢勝造靴場を創建した西村勝三とともに、帝国軍隊の軍需を支え、日本の皮革産業の源流とされている。

こうした江戸以来の皮革製品製造の伝統を生かし、現在も台東区は皮革関係の企業が日本一集中しており、浅草駅前には靴店が軒を並べているが、浅草は革靴の生産量が日本一で、山谷には日本唯一の皮革産業資料館も開設されている。

写真館

長崎で生まれ、ボンペに化学を学んだ内田九一（1844-1875）は、当時最先端のハイテクである写真師となり、1865（慶応元）年大坂に、1868（慶応4）年には横浜に、写真館を開業していたが、明治維新後の文明開化の時代に入ると、1869（明治2）年、浅草大代地に写真館九一堂万寿を開業、東都随一の写真師として名が知られた。

1872（明治5）年には、束帯、小直衣、金巾姿の明治天皇の写真を撮影し、天皇の西国御巡幸にも宮内省御用掛写真師第一号として随行している。また1873（明治6）年には、内田撮影の明治天皇洋装写真の複製が全国に下賜され、今日でも明治天皇の肖像といえはこの写真としてよく知られている（写真歴史博物館, 2012）。

公園

日本には存在しなかった欧米の文化である公園は、1873（明治6）年の太政官布告第16号「社寺其ノ他ノ名区勝跡ヲ公園ト定ムル件」に、公園

を公共施設として明記したことによって導入された。

この先進的制度によって、日本初の公園となったのは、広島県の厳島、鞆、高知県の高知公園、石川県の兼六園、香川県の栗林公園、大阪府の住吉、浜寺など、そして東京の増上寺、寛永寺、富岡八幡宮、飛鳥山と、浅草公園である。

上野公園が眺望の公園、目の公園といわれたのに対し、浅草公園は、口の公園、つまり飲食の公園といわれたが（サイデンステッカー、1986）、1884（明治17）年には一区から七区までに区画され、とりわけ六区は日本を代表する大興行街として繁栄することとなった。

バー

初の外国人向けのバーは、1860（万延元）年、オランダ人が横浜の外国人居留地に開業した横浜ホテルのバーだが、日本人向けは1880（明治13）年、神谷傳兵衛が浅草区花川戸4番地に創業した「みかはや銘酒店」である。その後1912（明治45）年に「神谷バー」と改名、現在も電気ブランで知られる有名店である。

高層建築、エレベーター

凌雲閣は1890（明治23）年、福原庄七が企画、凌雲閣株式会社が建てた、日本の高層建築のはしりである。8階までは世界の物産を集めた店、上層階は展望室で、設置されたエレベーターも日本初である。高層建築の無かった当時は、「浅草十二階」と呼ばれ、東京はもちろん、遠くの山々まで一望できる名所であったが、1923（大正12）年9月1日の関東大震災で8階以上が崩壊、危険なため軍が爆破解体、跡地は映画館になった（江戸東京たてもの園、2002）。

当時他にも、芝愛宕山山頂に5階建て、煉瓦造りで、塔の上には遠眼鏡が備えられた愛宕塔、土橋の江木写真館新橋支店の6階建て、といった高層建築が作られたが、いずれも凌雲閣と同様関東大震災で崩壊している（みなと図書館、1981）。

しかしながら浅草では、震災後も、浅草、東京の新しい象徴たらんと、6階建て40mの雷門ビ

ルが建てられているし（松葉、1988）、1932（昭和7）年には、雷門1丁目交差点に凌雲閣を模した森下仁丹の広告塔「仁丹塔」も建てられた。1942（昭和17）年に金属供出で解体されるも、戦後1949（昭和24）年に再建、1986（昭和61）年老朽化で解体されるまで存続していた。さらに2012（平成24）年には、凌雲閣南側の映画館跡地に松竹が建設する再開発ビルが、凌雲閣を再現した設計で建築されることが決定している。

美人コンテスト

危険性を指摘されたエレベーターが使用禁止となり、来場者が激減してしまった凌雲閣が1891（明治24）年に発想したのが、階段に芸妓100人の写真を展示し、来場者に投票させるという、日本初の美人コンテストである。美人写真を見ているうちにいつのまにか階段を上がっていたという奇策で、来場者数は復活し、経営危機を脱することができたという（NHK、2012）。

水族館

日本で初めて作られた水族館は1882（明治15）年、上野動物園中に開設された「鑑魚室^{うおのぞき}」だが、これは研究を主目的としたものであり、娯楽施設としての水族館としては、浅草四区の勸工場「共栄館」跡地に1899（明治32）年個人経営で開設された浅草水族館が初である。ヨーロッパ風の浅草水族館は劇場も設けて、東京名所となったが、廃止後はカジノ・フォーリーとなっている。

映画専門館

1903（明治36）年、吉沢商店が日本初の映画専門館「電気館」を開館した。それまで映画といえば、映写機を映写会場に持ち込んで上映するのが当たり前だったが、初めて映画専門の施設を発想したのである。

当初は輸入サイレント映画を上映、後に日本映画の専門館となり、松竹が経営、戦前は新興キネマ、戦後は大映の封切館となった。

映画が娯楽の王様だった時代、大正、昭和初期には電気館で映画を見ることは、人々にとってと

りわけ特別なことと感ぜられ（貴田，2003），この電気館をさがしに、浅草六区には戦後の最盛期、映画館、劇場が30館も立ち並び、活況を呈していた。その後大映が倒産、電気館は東映の封切館となったが、1976（昭和51）年に閉館となっている。

オペラ

日本で初めてオペラが上演されたのは1894（明治27）年、上野の東京音楽学校奏楽堂である。オーストリア帝国大使館員たちが、グノーの「ファウスト」第一幕を上演した。日本人による初演も東京音楽学校奏楽堂で、1903（明治36）年、音楽学校と東京帝大の教員、学生がグルックの「オルフェオとエウリディーチェ」を上演している。

一般向けの最初の公演は、1911（明治44）年、日本初の本格的洋式劇場である帝国劇場（有楽町）での定期公演で、イタリア人ローシーを音楽監督として招聘し、後に「蝶々夫人」のプリマドンナとして世界的名声を得る三浦環ら、音楽学校卒の俊英が参加した。しかし当時の日本人は、西洋音楽に馴染み始めたばかりで、オペラを鑑賞するレベルには無かったため、業績不振で、1916（大正5）年には廃止となった。

ところが浅草では、第一次世界大戦景気に沸く1917（大正6）年頃から、欧米の高尚な芸術とされたオペラを日本の大衆向けにアレンジした「浅草オペラ」を創始、これがブームとなった。これは本来のオペラとは程遠く、芸術扱いはされなかったものの、ブームに乗ってにわか歌劇団が次々結成され、原信子、清水金太郎、三越少年音楽隊出身の叩き上げながらテノールで聴衆を魅了した田谷力三、といったスターも誕生した。

浅草オペラに熱狂したファン「ペラゴロ」も登場、谷崎潤一郎、川端康成、宮沢賢治、小林秀雄、東郷青児、竹久夢二らもペラゴロで、芸術家として大いに刺激を受けている（民音音楽博物館，2012）。関東大震災で浅草オペラは終焉したものの、その後日本オペラ界最大のスターになった藤原義江も、浅草で田谷の歌唱を聴いて刺激を受け、オペラ歌手を志したのである（宮川，2008）。

ストリップショー

ストリップの初めは1947（昭和22）年、公職追放された秦豊吉がマルキ・ド・サドをもじった丸木砂土という別名で新宿の帝都座五階劇場で企画、演出した額縁ショー「ヴィーナスの誕生」とされる。舞台上に立てた額縁にヨーロッパの名画に見立てた半裸のモデルが静止したまま収まる趣向で、人気となったが、あくまでモデルは静止したものであった。

ただし、ストリップは脱ぐ、ティーズは焦らすの意味であり、最初から胸を見せている額縁ショーは正確にはストリップショーではなく、初のストリップショーとなると1958（昭和23）年、正邦乙彦がアメリカのストリップティーズからヒントを得て発案した浅草、常盤座の「ストリップショウ」である（西条，2012）。

サンバカーニバル

昭和30年代後半から40年ころ、斜陽化していく浅草に賑わいを取り戻そうと、浅草喜劇俳優の伴淳三郎と内山榮一台東区長が、ブラジルのサンバカーニバルを浅草の祭りとして取り入れることを発案、商店連合会を主体に1981（昭和51）年に開催されたのが初めである。

2012（平成24）年には31回を迎え、50万人の人出がある日本一のサンバカーニバルのコンテストとなっている（浅草サンバカーニバル実行委員会，2012）。

洋食

浅草には洋食屋も多く、新しい料理が次々提供されてきた。2009（平成21）年、ヒヨコ豆などの生地を油で揚げたイタリアのスナック、フェット・パニッサを日本で初めて紹介する専門店が開店したりしているように、今日もなお、浅草は新しい食文化の発信地となっている。

Ⅲ. 東洋初、日本初

地下鉄

東京に地下鉄をという計画は、1919（大正8）年発表の、東京市内外交通調査委員会の調査書か

ら始まった。関東大震災後の変更を経て、1925（大正14）年東京特別都市計画として決定、東京地下鉄道会社によって着工された。こうして1927（昭和2）年上野―浅草間2.2kmが開業、これは東洋初の地下鉄で、自動改札機、鋼製車両、乗務員のモダンな制服などが話題になり、杉浦非水デザインの「東洋唯一の地下鉄道」というポスターも、グラフィック・デザイン広告の基礎を築いた有名な作品である。

地下鉄はその後新橋まで延長され、1939（昭和14）年には東京高速鉄道会社の渋谷―新橋間との直通運転を開始、現在東京メトロ銀座線となっている。戦前の日本の地下鉄は、大阪の現御堂筋線と合わせて2線だけであった。

商店街

江戸の人口増とともに浅草寺参拝客も増え、浅草寺境内の掃除の賦役を課せられていた近くの人々に対して、境内や参道に出店営業の特権が与えられたのが仲見世の始まりで、元禄、享保の頃といわれる。

江戸時代には、伝法院から仁王門寄りやくだなは役店と呼ばれ、20軒の水茶屋があった。雷門寄りひらみせは平店と呼ばれ、玩具、菓子、みやげ品などの店があった。

明治政府は、寺社の所領を没収、浅草寺境内も東京府管轄となったが、公園法により浅草公園とされ、それまでの仲見世の特権が取り上げられて、1885（明治18）年には仲見世全店の立ち退きが命じられた。その跡地に作られたのが、それまでの門前町では考えられない異文化の赤煉瓦造り商店街で、これが近代の仲見世の誕生である。

この赤煉瓦の仲見世は1923（大正12）年の関東大震災で壊滅、現在の鉄筋コンクリート造り、桃山風朱塗りの商店街に生まれ変わり、1945（昭和20）年の戦災で内部は焼失したものの、復興、現在89店が営業している。

またこの商店街は2012（平成24）年、地震対応マニュアルを作っているが、これも日本の商店街で初だという（仲見世商店街、2012）。

テーマパーク

現在は遊園地として知られる「浅草花やしき」は、1853（嘉永6）年に千駄木の植木商、森田六三郎が牡丹と菊細工を見せる施設を発案、「花屋敷」として開園したもので、日本の遊園地第1号とされる。

その後、昭和初めのライオンの赤ちゃん誕生、1996（平成8）年のタワー型垂直打ち上げ式アトラクション開業といった日本初も記録されている。

五重塔登頂

日本で初めて、有料で五重塔の足場に人を登らせることを発想したのは、浅草寺である。明治初年に修理を必要としたが、資金が無く、工事用足場を有料で公開するという奇策を思いつき、これが大当たりで、1886（明治19）年には修理が可能となっている。

ハリボテ富士山

浅草寺五重塔公開で、高い所に登らせると金を稼げることがわかり、次に発想されたのが、ハリボテ富士山である。

1887（明治20）年、浅草公園六区4号地（現ROX）に、木骨石灰塗り込め作り、高さ32.4m、裾周り270mという巨大さで作られた。螺旋状の登山路もあって登頂でき、25坪もある頂上は展望台だった。しかし経営はうまくいかず、大風で壊れ、結局2年半で取り壊されて、跡地にはパノラマ館が作られた（手島、1995）。

展望塔

1967（昭和42）年、斜陽化する浅草の起死回生の呼び物にしようと浅草寺境内に開業したのが、スペースタワー（宇宙塔）と呼ばれた日本初の展望塔である。

高さ110m、エレベーターと展望台を兼ねた部屋が、自転しながら上昇するという奇抜なアイデアで、寺の景観とそぐわないなどの反対論を乗り越えて開業したものの、経営困難で6年後には廃業、解体されている（朝日新聞、1967）。

屋上遊園地

日本で初めて、ビル屋上に遊園地を作ったのも浅草である。1931（昭和6）年、東武浅草駅ビル松屋浅草店屋上に、日本娛樂機製作所（現・ニチゴ）によって開発された日本初の自動木馬を設置し、「スポーツランド」という名称で開設された。

自動木馬の他に、8人乗りロープウェイ「航空艇」も設置され、屋上両端を往復、隅田川が見渡せる名物となり、ローラースケート、ボウリング、自転車競走、ボートレース競技、競馬機、半弓射撃機、自動キネマ、パチンコ遊技機、そして小動物園もおかれていた。

また、この松屋浅草店自体も、高層建築として抜きん出た存在で、広く知られる浅草のランドマークとなっていた。

国産ローラーコースター

1953（昭和28）年、株式会社トーゴが製造した国産初のローラーコースターが花やしきに設置された。トーゴもこれをきっかけに、コースターメーカーとして躍進、このローラーコースター自体も現存最古として、今も活躍している。

芋ようかん

浅草銘菓の代表は舟和の芋ようかんだが、これは羊羹といえど高価な高級和菓子の煉羊羹が当たり前の時代に、さつまいもを原料にするという新発想によって創り出された庶民的な和菓子である。

この革新は、寿町の芋問屋小林和助と、和菓子職人石川定吉が出会ったことによるもので、和助は自身の名から和を、定吉の出身地船橋から舟をとり、1902（明治35）年舟和を創業したのである（舟和、2012）。

みつ豆

現在みられるようなみつ豆を初めて創ったのも舟和である。1903（明治36）年、「みつ豆ホール」を開設し、それまではしん粉、赤えんどう豆に糖蜜をかけただけが当たり前だったみつ豆を、洋銀の器に、角寒天、甘煮杏、ぎゅうひ、赤えんどう豆を盛り、蜜をかけて銀のスプーンで食べるとい

う現在のような高級感あるものとして革新し、売り出したのである（舟和、2012）。

さくら馬肉

馬刺しをさくらと呼ぶのは、詩人の高村光太郎が、詩集『道程』の中で「浅草の洋食屋は暴利をむさぼってビフテキの皿に馬肉を盛る。泡の浮いた馬肉（さくら）の繊維、シチュウ、ライスカレエ、癌腫の膿汁をかけたトンカツのにほひ」と書いたのが始まりだといわれる。

お座敷遊び

2007（平成19）年に芸者としてお披露目した紗幸はオーストラリア人で、浅草初の外国人芸者として話題を呼んだ。慶応大学卒、オックスフォード大学社会人類学博士号取得、という極めて異色の存在でもあり、普通のお座敷だけでなく、ホームパーティーに呼ばれたり、お年寄りや女性向けに「ランチお座敷」を始めたり、メールで芸者を呼べるシステムを構築したりと、次々と革新的お座敷遊びを発想している（朝日新聞、2009）。

離婚式場

「離婚屋敷」と呼ばれる会場で離婚式、という新しい商法が浅草で登場している。式は司会者による離婚に至った経緯説明、夫婦、友人代表挨拶、最後の共同作業としての結婚指輪をハンマーでたたき割る、という手順で進み、その後は会食、そして浅草の街を観光という斬新な発想である（離婚式、2012）。

道具街

諸道具の店を一か所に集めるという道具街も、浅草が発祥ではないものの、かっぱ橋道具街が日本一である。

これは大正の初め、新堀川両岸に古道具を商う人たちが店を出したのが発祥で、関東大震災後菓子道具を扱う商店を中心に食関連の店が集まり、戦後は飲食業界のニーズに対応した様々な業種の店舗が集まり、現在800mに170店が集まっている（かっぱ橋道具街、2012）。

V. 異人、芸人、芸術家

渡来人

浅草寺の本尊となった観音像を漁網で引き上げた兄弟は、実は渡来系ともいわれる（鈴木、1989）が、江戸時代以降も浅草は、各地から多様な人々を引き寄せてきた。そうした異質の人々が出会うこの街で、異質の人、文化と出会い、文学者、芸人などとして名を上げた人物は数多い。

永井荷風

奇人として知られる永井荷風（1879-1959）は、「上辺の西欧化に専心」（『花火』、1919）する世の中を好まず、新しい東京を嫌悪し、江戸と色街を愛した文豪、などと評される。

荷風は江戸の面影を求め、浅草歓楽街、玉の井私娼街などを歩き、1937（昭和12）年には『溼東綺譚』を発表した。浅草軽演劇、レビューを愛し、踊り子や劇場関係者とも親交を結んだが、1938（昭和13）年には作曲家菅原明朗と歌劇『葛飾情話』を作り、浅草オペラ館で上演したこともある。これは日本人の創作による本格的な歌劇上演の試みとして話題を集め、荷風は『葛飾情話』の映画化や第二作『浅草交響楽』の案も練っていたという。

戦前、戦中の軍国主義時代にも、荷風は浅草に出かけ、戦後も市川に住み、背広に下駄履きで浅草を散策、創作を続けた。1949（昭和24）年～1950（昭和25）年には浅草ロック座で『渡り鳥いつ帰る』、『春情鳩の街』などが上演され、荷風自身も舞台に立ち、楽屋では踊り子たちと談笑する姿が新聞に載るなど話題を集めた。

1959（昭和34）年3月1日、病に倒れたのも浅草「アリゾナ」での昼食中であり、4月30日に自宅で孤独死しているのが発見された。

川端康成

川端康成（1899-1972）は大阪出身だが、上京後は浅草蔵前に住み、新進作家時代には1929（昭和4）年、浅草水族館2階で旗揚げして大人気だったカジノ・フォーリーのレビューに通い、

楽屋に出入りして踊り子たちから「川端の兄さん」と親しまれた。こうした浅草での出会いをもとに書かれたのが、浅草の風俗誌的な小説『浅草紅団』である。

川端の他にも武田麟太郎など、浅草に通い、文名を上げた作家は多く、1937（昭和12）年浅草田島町に開業したお好み焼き屋「染太郎」のごとく、多くの芸人、文士達の出会う場となり、愛されてきた飲食店も数多い。

古川緑波

古川緑波（1903-1933）は、徳川夢声らと浅草で喜劇団「笑いの王国」を結成、ロッパの愛称でエノケン榎本健一と並ぶ人気者になった。

榎本健一

榎本健一（1904-1970）は1922（大正11）年、浅草オペラの舞台に立ち、1929（昭和4）年には喜劇に転じて人気を博し、「エノケン一座」を旗揚げし、西洋を意味する「あちら」をもじって名付けられた「アチャラカレビュー」で一世を風靡した喜劇俳優である。

渥美清

渥美清（1923-1996）は、1953（昭和28）年、浅草フランス座に入り、コメディアンとして活躍。テレビドラマ主演でスターとなったが、山田洋次監督映画『男はつらいよ』の主人公フーテンの寅、車寅次郎として絶大な人気を得た。

ビートたけし

浅草生まれのビートたけし（1947- ）は浅草のコメディアンを経て1973（昭和48）年、漫才コンビ「ツービート」を結成、風刺と毒舌で注目され、その後は世界的な映画監督としても活躍している。

第3章 はずれの街・浅草

I. 武蔵野の末

浅草の地名は鎌倉時代の初期にはすでにあり、

浅草寺を中心に集落が営まれていたというが、地名のいわれは「武蔵野の末にて草もおのずから浅々しき故浅草と云いしなるべし」（朝日新聞社会部、1986）などといい、武蔵野の末というはずれであった。

さらに、元々武蔵と下総の国境は隅田川である。室町後期にはあやふやになり、江戸後期にはいつの間にか江戸川となったとも、江戸初期・家光の時（1639）のお触れによって変更されたともいわれるが、江戸後期の滝澤馬琴も、江戸川ではなく隅田川を国境として書いている。すなわち浅草は、江戸時代であっても、文字通り武蔵の国の末、はずれの街だったのである。

II. 水との境界の地

海との境界の地

海からは遠く隔たっているはずの浅草でありながら、浅草海苔の名が有名であるが、実は鳥越が15世紀末ころでもなお海辺の村だったほどで、海は浅草近くまで入り込んでおり、実際江戸時代初期までは、海苔が採れたのである（サイデンステッカー、1986）。

浅草寺も、漁師、船乗りにとって、海上からのランドマークだったが（上田、1996）、その後、隅田川河口の海苔漁師は魚を禁じられたため品川、大森に移転、隔年3月17、18日の三社権現の祭礼には品川、大森から船を出すことが恒例となった（大石、2003）。

隅田川

甲武信岳の水源地从ら東京湾に流入するまでの今の隅田川は荒川と呼ばれたが、地域により異称があり、江戸時代には浅草川、その川から浅草寺が見える範囲を宮戸川、またその下流は単に大川と呼ばれた（鈴木、2006）また隅田川西岸は墨堤、西岸の両国橋から新大橋あたりまでは大川端と呼ばれた（中江、2000）。

この隅田川には、白魚料理が好きな徳川家康が、三河湾から白魚を移させ、隅田川筋で取れる白魚には葵の紋があるといわれたし（かのう書房、1989）、厩橋上手から今戸橋辺は浅草寺の主張に

より殺生禁断ともされ、釣り、漁などはできなかったが（小木、1991）、浅草は、隅田川という大きな川に接する、江戸・東京の街の水際だったのである。

墨堤

江戸幕府は江戸市街を洪水から守るため、隅田川右岸に日本堤、左岸に隅田堤、熊谷堤、荒川堤を築いた。日本堤は浅草聖天町付近から山谷堀に沿って西北に延び、三ノ輪付近で上野台地に接続する堤で、土手上の道幅は約8メートルもあり、吉原へ通う道として交通量も多く、店が並んでいた。

他方の隅田堤は、綾瀬川との合流地点から新小梅町あたりまでで、それから下流は堤防が無く、左岸は水害時には遊水地代わりにされていたのである。

また日本堤、隅田堤の北側は水田地帯で、漏斗状の堤防と狭窄部で水が防げるため堤防が必要なかった。

こうして近世、近代には江戸・東京の市街地が水害を受けることはあまり無かったが、元々遊水地代わりにされていた現在の北区、荒川区、葛飾区、足立区、江戸川区などが市街地化し、これらの地域が洪水常襲地となったのである。

その後堤防が整備され、水害はほとんど発生しなくなっているが、隅田川は、右岸の江戸・東京中心部にとっては、まさに水の脅威に直面するはずれの街なのである。

II. 山との境界の地

待乳山

台東区浅草七丁目付近は待乳山と呼ばれ、待乳山聖天聖観音宗本竜院がある。江戸八景待乳山暮雪にも選ばれていたが、平地の浅草では唯一の自然の小高い丘である（大江戸八百八町、2012）。

金龍山

日本列島の原初的信仰形態の一つは山岳信仰であり、仏教も当初は山岳仏教として導入され、修験道が発達し、社寺は山頂か山頂を望む山麓に建

立された。氏子や檀家の利便性、政治的理由で平地に建てられるようになって、社寺共に中国唐代の山中の禪寺から起きた山号を有することになった。いわば仮勧請であり、本願の地は、あくまでも山岳にあるというわけである。

それゆえ浅草寺も、寺域は金龍山、その山際は奥山である。さらに、延暦寺にならってか、34の寺院は雷神門入ってすぐの南谷、隨身門前は東谷あるいは中谷、北側の竹門を入ったあたりは北谷と三つの谷に分けられていた。

また、先述のように、浅草には人工富士山が作られたが、奥山には、奥山の感じをだすために吊り橋も架けられていた（サイデンステッカー、1986）。

浅草寺は平地に立地しながらも、山の辺とされているのである（竹内、2000）。

Ⅲ. 交通、物流結節点

舟運

在原業平『伊勢物語』の「名にしおはば いざこととはん宮古鳥 わがおもふ人は ありやなしやと」はおそらく橋場付近の渡船場を想定したものとといわれる（台東区、1997）。

また1180（治承4）年、石橋山で敗れた源頼朝は、安房に逃れて兵力を整えた後、10月下総から武蔵へ軍を進め、隅田宿に至った。この時隅田川西岸の石浜を領していた大福長者江戸重長は、多数の船を出して、隅田川に浮橋を架し、助けたという。

武蔵から下総へ向かう隅田川の渡船場のある浅草は、交通の要地として、平安時代にも都人に知られていたのである（竹内、2000）。

浅草湊

江戸は平安時代から中世を通じて、西日本との太平洋海運と、北関東からの河川舟運の結節点だった（岡野、1999）。中でも石浜は、中世には海に近く、西国からの遠距離海船が発着する湊であり（竹内、2000）、同時に、利根川、常陸川水系で銚子、関宿、栗橋などとも結ばれ、重要な交通の結節点であった。

『義経記』によれば、江戸重長が源頼朝のために出した多数の船も西国からの廻船といい、関東八か国を代表する大福長者重長の経済基盤も多数の西国商船がやってくる石浜を支配していたからとされる。石浜には大きな交易、海運業者があり、今戸には問（問屋）がいて、称名寺の寺領から納入された年貢の運送、保管、売却にあたり、隅田川の川船、江戸湾の海船を差配していたという（台東区、1997）。

近代に入ると、隅田川の港湾機能は更に高まり、多くの船が物資を運び、河岸はセメント、ビール、紡績など各種産業の発祥地として、臨海工業地帯を先取りした工業地帯となり、汚染されることもなった（陣内、1993）。

日光街道

日光街道は日光道中ともいうが、近世初期までは奥州道と呼ばれ、宇都宮から日光までが日光街道とされていた。日光に東照宮が建立されて社参が頻繁になると、宿駅などが整備され、江戸―宇都宮間も日光街道と呼ばれるようになった。

日光街道最初の宿場千住宿まで、日本橋からは浅草、吉原、汨橋、そして小塚原の処刑場、火葬寺を通過する。日光街道、現在の国道4号線は、東北方面から江戸・東京への、人、もの、情報の経路であり、浅草はその出入り口に当たっていたのである。

路面電車

明治以降鉄道交通の時代になっても、浅草は結節点であり続けた。

新橋横浜間鉄道開業と同じ1872（明治5）年に、紀州出身の由利成正が雷門、新橋間で乗合馬車の営業を始めたが、1882（明治15）年には、東京馬車鉄道株式会社により、新橋、日本橋、上野、浅草、浅草橋を結ぶ軌道上を走行する鉄道馬車となっている。

同社は1900（明治33）年、電車への動力変更の特許を得て、東京電車鉄道株式会社と改称、1903（明治36）年に電車転換を開始し、1904（明治37）年、雷門―駒形二丁目―厩橋―蔵前―

浅草橋駅前一浅草橋、上野駅前一雷門が開業している。1911（明治44）年には市内の路面電車を東京市が買収、東京市電気局による東京市電となり、現在は東京都電となっている。

地下鉄

先述のように、現在の東京メトロ銀座線は、1927（昭和2）年に上野―浅草間2.2kmで開業、東洋初の地下鉄である。

東武鉄道

1897（明治30）年創立、1899（明治32）年、北千住、久喜間開業に始まり、1902（明治35）年に吾妻橋駅（現東京スカイツリー駅）に延伸、1910（明治43）年吾妻橋駅を浅草駅と改称している。隅田川を越えるには多額の経費がかかるため、隅田川右岸に乗り入れたのは、1931（昭和6）年で、この時に現在の浅草駅、当時は浅草雷門駅が開業、他方それまでの浅草駅は業平橋駅に改称している。浅草雷門駅が浅草駅と改称されたのは、終戦直後の1945（昭和20）年10月1日である。

こうして浅草は、北関東一円と東京を結ぶ鉄道交通の出入り口、結節点となったのである。

物流

こうして物流の結節点となった浅草には、江戸時代、蔵前に幕府の米蔵が並び、舟で運び込まれた米が蓄えられたし、明治以降も、問屋、卸などの業者が多く集まり、物資流入の出入り口となっている。

今日でも、浅草橋は人形、浅草は靴など皮革製品の業者が多いが、かつては産地川越から隅田川舟運で運ばれたさつまいもを扱う芋問屋も浅草で多数営業していた。舟和を創業した寿町の小林和助も芋問屋であるし、駒形2丁目のさつまいも菓子専門店「おいもやさん興伸」も、1876（明治9）年創業のさつまいも問屋川小商店が1984（昭和59）年に始めたものである（おいもやさん興伸、2012）。

情報

交通の結節点としての浅草は、情報の出入り口でもあり、江戸時代、現在の浅草橋3丁目にあった浅草天文台は、幕府の公設天文台の一つで、暦を作成していたため暦局などとも称されたが、幕府の翻訳局もあり、最新の情報が集まる学術研究の中心だった。

さらに、明治政府が江戸幕府から接收した図書を収蔵したのが書蔵館だが、これが浅草文庫となり、後の東京国立博物館資料館となっている。

第4章 鬼門の街・浅草

I. 江戸・東京の鬼門

鬼門

鬼門とは丑寅（北東）のことで、邪悪な鬼が出入りするとして万事に忌み嫌われた方角である。江戸城でも丑寅の方角にある平川門は不浄門とされ、城内から死体、犯罪者を出すのに使われたが、その先の丑寅の方角、すなわち上野、そして浅草は、江戸の都市空間に侵入し、危害をなす邪悪な鬼が侵入する、危険な場所、最前線だったのである。

姥ヶ池の鬼婆

浅草寺近くの姥ヶ池は、昔は隅田川に通じる大きな池で、1891（明治24）年に埋め立てられ、現在は公園となっているが、浅草寺の子院妙音院所蔵の石枕にまつわる鬼婆の伝説が残されている。

昔、浅茅が原の一軒家で、娘が連れ込む旅人の頭を石枕で叩き殺す老婆がおり、ある夜、娘が旅人の身代わりになって、天井から吊るした大石の下敷になって死ぬ。老婆はそれを悲しんで悪業を悔やみ、池に身を投げて果てたため、里人がこれを姥ヶ池と呼んだという。

武蔵野の末で、鬼門から江戸に向かう街道の出入り口に当たる浅草には、鬼婆が棲んでいたというわけである。

II. 鬼門除け

神田神社

鬼門は鬼が侵入してくる方角として恐れられたから、丑寅の方角には、多くの鬼門除けが設けられた。呪的都市計画を進めた天海は、それまで豊島郡芝崎村にあった江戸の産土神神田神社を、江戸城の鬼門にあたる大手町の現在地に移し、鬼門除けとしている。

神田神社近くの太田姫稲荷神社、柳が植えられた柳原土手なども城外の鬼門除けとされる。

寛永寺

寛永寺は、京都の鬼門を守る比叡山延暦寺にならい、江戸の鬼門上野の山に造営された。山号も東の比叡山を意味する東叡山で、寺号の寛永も、延暦寺が延暦年間造営ゆえの命名であることにならい、寛永年間に造営されたことによるものである。

1627（寛永4）年にはさらに、寛永寺の隣りに家康を神として祀った上野東照宮を建立している。江戸の鬼門を、仏教の力だけではなく、神道の力によっても厳重に守ろうとしたのである（宮元、2001）。

また江戸から遠い筑波山も鬼門鎮護の山とされたといわれ、江戸に事あるごとに調伏の祈祷が行なわれたという。

浅草寺

浅草寺は江戸最古の天台宗寺院で、江戸の産土神、地霊の一つだが（宮元、2001）、江戸の鬼門に位置しているため、幕府の祈願所とされ、それまで祀られていた三神に加えて徳川家康が祀られ、家康自ら神となって鬼門を守り固めることとなっている。

浅草三十三間堂

浅草三十三間堂は、京都の三十三間堂（蓮華王院）を模して1642（寛永19）年に建てられた、南北66間、東西4間、四面回り縁の堂で、本尊は千手観音である。1698（元禄11）年に勅額火事で類焼した後御用地となり、翌年永代浦築地へ

代替地（現江東区富岡2丁目）を拝領し、1701（元禄14）年に再建されたが、1872（明治5）年に廃止、解体されている。

四方封じ

寛永寺と裏鬼門増上寺、浅草寺と日枝神社を結ぶ線は江戸城本丸で交わるし、浅草の三社祭、日枝神社の山王祭、神田神社の神田祭は江戸三大祭とされる。これは宮元健次によれば平安京の四方封じにならったもので、四か所の社寺で江戸城を守り固め、年一回の祭りで浄めるのだという。

また宮元は、将門の身体の一部、身に着けていたものを祀った神社、塚が五街道と堀の交点である城門に隣接して配置されているのも、江戸の地霊である平将門の身体やそれに類するものを切り刻み、神社や塚として祠ることによって、街道を通して江戸に侵入する悪鬼を封じようとしたのだろうという。すなわち、大手門の首塚は奥州道、神田橋門の神田神社の胴は上州道、田安門の世継稲荷神社の首桶も上州道、牛込門の津久土八幡神社の足は中山道、四谷門の鎧明神の鎧は甲州道、虎ノ門の兜神社の兜は東海道、そして浅草橋門の鳥越神社の手は奥州道を守護するのだという（宮元、2001）。

日光

日光街道、そして現在も東武鉄道が浅草と結ぶ日光は、徳川家康の墓所である。つまり八州の鎮守になりたいと遺言した家康は、死の2日後には吉田神社の唯一神道の方式で神に祭り上げられた。それゆえ、葬儀は行われず、遺体は江戸の裏鬼門、久能山に埋葬され、さらに江戸の北の日光へ移され、東照宮奥の院宝塔の地下石室に安置されている。家康は死後も江戸の北を身を挺して守っているというわけである。

第5章 穢れ排除先の街・浅草

I. 死という穢れの排除

火葬寺

人にとって死はもっとも恐るべき最大の穢れで

あるが、動物である人は当然死に、死体となるから、そのままでは、都市空間は穢れの充満した空間になってしまう。それゆえ、死体を排除する空間を設定するが、江戸の場合、その一つとされたのが鬼門の浅草だった。

1735（享保2）年の『続江戸砂子』に「正保、慶安の比迄は浅草，下谷の寺院，皆境内に龕屋ありし」とあるように、江戸中期頃まで江戸のほとんどの寺は境内に火屋，火家と呼ばれた火葬場を設置していた。当然火葬の臭気などが周辺の人々に嫌悪されていたが，4代将軍徳川家綱が寛永寺に墓参した際，上野，浅草の寺々の火葬の臭気が及び，1669（寛文9）年に密集地の火葬場を廃し，新たに火葬寺，火葬場が設けられることとなったが，その移転先は，浅草から日光街道を下った千住宿南組の小塚原である。

他の方面でも，火葬場が設けられたのは境界的空間で，幕末になると江戸の火葬場は，小塚原火葬寺，深川靈巖寺，砂村新田極楽寺，芝増上寺今里村下屋敷，代々木村狼谷，上落合村法界寺，桐ヶ谷村靈巖寺の7カ所と，幾つかの寺院内となった。このうち小塚原火葬寺，上落合村法界寺，代々木村狼谷，桐ヶ谷村谷村靈巖寺の火葬場は，現在の東京博善株式会社の町屋葬祭場，落合葬祭場，代々木八幡葬祭場，桐ヶ谷葬祭場へと発展してきている。

投込寺

栄法山清光院浄閑寺は，奴隸同然だった吉原遊女が病気などで死んだ場合，この寺に投込まれたといわれる寺院である。安政大地震（1855年）の際に死亡した大勢の遊女をこの寺に投げ込んで葬って以降，投込寺と呼ばれるようになり，現在も1743（寛保3）年から1926（大正15）年までの遊女やその子供を記した過去帳が残っている（浄閑寺，2012）。

西方寺は現在豊島区にあるが，江戸時代には吉原に至る日本堤にあった。明暦の頃（1655-1657）に道哲という念仏僧が草庵を結んだのが始まりとされ，別名道哲寺，土手の道哲としても知られていた。道哲は，刑死者や無縁仏の供養のた

め，昼夜の別なく念仏を唱え鉦を叩き続け，引き取り手のない吉原の遊女の死骸も引き取り，供養した。遊女などの無縁仏が投込まれたために，投込寺とも呼ばれたといわれる。

II. 犯罪という穢れの排除

浅草刑場

江戸の仕置場は初め本町4丁目（現中央区）付近にあり，後に2箇所に分れ，一方の移転先が浅草である。浅草刑場は『御府内備考』によると「浅草今戸橋手前東側」「新島越町一丁目西方寺向かい，日本堤上り口，八間斗の明地」「此西方寺の門前すこしき所明地にて，十間ばかりの長さ，幅は二間斗もあらん所」等と記されている。『武江年表』はこれらの説をもとに「山谷堀今戸橋の南木戸の際，西方寺の前，すこしく土高くなりし明地，十間ばかりの長さ，幅二間ばかりの所」と紹介している。

須賀橋は俗称地獄橋と呼ばれたが，これも囚人がこの橋を渡って刑場に引き立てられ，処刑されたことによるものである。

小塚原刑場

鳥越刑場はその後1651（慶安4）年，小塚原（現荒川区南千住2丁目）に移転したが，大和田刑場（現八王子），東海道の江戸の出入り口にあたる品川宿の先の鈴ヶ森刑場とともに，三大刑場と呼ばれ，日光街道で浅草を過ぎた最初の宿場千住の手前という江戸の境界的空間にあった。

明治初期に廃止されるまでに，磔，火焙り，獄門で20万人以上が処刑され，牢で斬首された首はここに運ばれて晒された。刑死者を吊うために小塚原回向院，首切り地藏が建立されているが，死体はきちんと埋葬しなかったから，腐敗し，野犬，カラスが食い荒らす，というすさまじい有様であった。

また，日光街道の浅草の先日本橋側手前の思川には汨橋が架けられていたが，囚人がこの世，家族，親族などと別れる橋であり，これより手前は現世，この先は他界と認識されていた。

Ⅲ. 廃棄物という穢れの排除

浅草紙

「鼻をかむ 紙は上田か 浅草か」という句があるように、浅草近辺で作られていた浅草紙は、信州の上田紙、京都の西洞院紙などとともによく知られていた。

會田隆昭によれば、発祥の地は紙漉町と呼ばれた現在の浅草田原町1丁目、現雷門一丁目（田原小学校付近）だが、『新選東京名所図会』には「往古千束郷広澤新田の内にして、浅草寺領の田圃なり。居民耕作の餘多く紙漉を業とせしを以て俗に紙漉町と唱へしが、人家斬く過密になるによって、三丁に区分し、もと田畑なりしに因り、今の町名を附したりといへり」と書かれている。

起源は、慶長期（1600年頃）に浅草寺が屑紙を与えて、この地区の農民に副業として寺用の漉き返し紙を漉かせたのが始まりとか、元禄時代（1688-1704）の『江戸真砂六十帖』に、日本橋馬喰町で紙販売業を営む紙屋五兵衛が浅草紙と称して屑紙を漉いた下等の紙を売り始め、非常に繁昌したと記されているともいわれる（會田、2002）。

浅草紙は、今日という再生紙であるが、寺田寅彦によれば、色は鈍い鼠色、裏側はざらざらして荒筵^{あらむしろ}のやうで、穴も多いが、タバコの巻紙、広告チラシなど小さな紙片が混ざり、印刷されていた文字まで読めたりする、時には糸、毛髪、虫まで混ざっている、などというきわめて品質の悪い紙だったという（寺田、1921）。

浅草は、バタ屋などが市中で拾い集めた屑紙を屑物商が買い取り、落とし紙などとして再生する街だったというわけだが、その後近辺の宅地化、市街地化、観光地化などにより、生産の中心は、浅草寺の裏手に当たる山谷周辺や橋場方面へ、さらに千住、本木、梅田など移って行った。

Ⅳ. 排泄物という穢れの排除

おわい船

鳥越川、三味線掘は大正末に埋め立てられるまで、おわい船がし尿を運ぶのに用いられていた。蔵前の米蔵に米を運んだ帰途には、し尿を積んで

いったのである（台東区教育委員会社会教育課、1977）。

し尿投棄所

大正時代に入ると、下肥の利用が減り、東京市は、し尿を処理するために硫酸アンモニア工場建設を計画したが、議会の賛同が得られないため実現しなかった。

やむなく1921（大正10）年にし尿投棄所を設けたが、その場所は浅草区内南元町、栄久町、松清町で、1931（昭和6）年に綾瀬処理場ができるまで存続した（東京下水道史探訪会、2012）。

糞尿列車

鉄道の開業後は、貨車による下肥輸送も行われた。東武鉄道の場合は、1935（昭和10）年に隅田川の堤防そばまで0.6kmの千住貨物線が開通し、1955（昭和30）年まで、隅田川のおわい船で都心から運ばれたし尿を貨車に積み替え、埼玉方面に輸送していたのである。

V. 工場地帯

隅田川沿いは、江戸以来桜の名所だったし、1883（明治16）年にはボートレースが始まり、明治20年代には水泳場も設けられていた。ところが、明治半ばから多くの工場が立てられ、川は工場排水で汚染され、隅田堤は工場労働者の通勤路、運搬馬車の輸送路にされていった。

都心から隔たった隅田川沿いは、工場という新たな文化の中でも、汚水、ごみ、騒音といった新たな穢れを伴う施設を引き受けさせられたのである（陣内、1993、2003）。

第6章 被差別民と細民の街・浅草

I. 江戸の被差別民

弾左衛門

中尾健次によれば、弾左衛門とは、江戸時代に関八州、伊豆、駿河、甲斐、陸奥の一部に住んでいたえた身分、非人身分、猿飼身分を支配した関八州えた頭の通名である。

1742（寛保2）年非人頭が弾の支配に組み込まれたため、元々非人頭の管轄だった溜（囚人病院）の管理責任者ともなり、1800（寛政12）年には、三身分合計7,720軒余を支配、数か村、数十か村におよぶ範囲を編成単位として、小頭がおかれ、弾に年貢銀などを上納していた。

さらに弾は、他の身分の者がかわっていない事件に対して独自の裁判権も持ち、死刑を含む刑罰を執行することができた。非人組織は封建社会から締め出された人々を身分制度の枠内で管理し、食い止める防波堤として利用されたのである。

大名は職人、特に皮革職人を抱えていることが強みだったが、徳川家康は、北条の支配下にあった長吏太郎左衛門を認めず、北条に解任され路頭に迷っていた弾左衛門を抜てき、弾を通して皮革統制を行った（中尾、1996）。

弾は軍事用革細工だけでなく、灯心細工、太鼓細工も行っていたが、この弾左衛門役所、弾左衛門居宅があったのが浅草新町である。弾左衛門役所には御白州、牢屋があり、役所の前には処刑場、北に進めば、小塚原の処刑場もあった（小林、1987）。

御仕置役

江戸時代の刑罰は死刑が中心で、下手人、死罪、火罪、斬首の上獄門、磔、鋸引きのうえ磔の刑が行われた。実際の処刑は、同心が行う斬首は牢屋敷で非公開放だが、火罪、磔は仕置場で、引廻し、獄門も公開でおこなわれ、それを担ったのが御仕置役の弾とその手下であった。

弾左衛門は御仕置役の代償として、瀬戸物町、小田原町両辻での灯心商いを無地代で営業できる特権を与えられていたが、御仕置役は民衆の憎悪の対象となり、えたの称に象徴される社会外、人外の実在として認識され、差別されたのである（中尾、1996）。

非人頭・車善七

非人は遊郭の清掃（清め）を仕事としていたが、新吉原の裏には貧人頭、後に非人頭と称されるようになった車善七が住んでおり、その下の場所に

は「溜」（非人溜）があった。非人溜は1687（貞享4）年、町奉行所と火付盗賊改方から病囚を預かったことに始まり、浅草溜は、車善七が管理、900坪（約3,000平米）が下付され、溜の運営には非人の手下の小屋持ちがあたっていた。

車善七は窮民対策も任せられ、管轄は新橋から北、新宿から北のほぼ全域である。野非人制道を捕らえて故郷を質し、できれば帰農させるが、実際は手下にし、町方の職務である通常のゴミ処理の対象とならない死体、紙屑など不浄物の清掃作業や土木工事をさせた（中尾、1996、今西、2007）。

明暦大火の後、弾は死体片づけ、施行を命じられた際、車に協力させ、後には支配下においた。

江戸拡大と、窮民増加で、品川松右衛門、本所、深川の深川善三郎、代々木久兵衛も非人となり、俗に「四カ所」と呼ばれていたが、1721（享保6）年、弾は偽文書で、四人の非人頭が支配下と評定所に認めさせ、非人頭の職務だった溜御用、無宿刈り込みも監督、関八州長吏も支配下に置いた。さらに、寺社境内、空き地で草芝居、狂言などの見世物を行っていた浅草龍光寺門前の乞胸も支配下に入れている（中尾、1996）。

II. 近現代の被差別民と細民

被差別民

1868（慶応4）年、弾左衛門は幕府によって平人に身分が引き上げられ、正式に与力格になったが、幕府はその後すぐに崩壊、明治政府は、賤民制廃止と同時に、皮革などの職務を取り上げ、弾による被差別民支配の解体を図った。これに対して弾直樹は、先述の通り、軍靴製造に生き残りをかけたが、会社設立に失敗して崩壊した。

同様に、明治に入ると、非人の川まわり船、乞胸の支配も解体され、願人も消滅し、これが細民街、スラムの形成へとつながったのである（中尾、1996）。

細民街

1900（明治33）年の職業調査によれば、貧しい下層である人力車曳きが職業別で最も多い区は

本所、下谷、深川、神田、そして浅草区で、これは職人の分布ともかなり一致していた（江波戸、1997）。

1925（大正14）年の乳児死亡率でも、東京市平均130.0、富裕層の多い麹町区は92.0、赤坂区100.0に対し、深川区163.3、本所区156.8、そして最悪が浅草区の172.9%である（今、2001）。

戦前においても、全国的に知られる東京の細民街といえ、深川富川町と、浅草の通称田中町（田中町、地方今戸町付近）だったのである。

階層

1876（明治9）年、お雇い外国人医師として来日し、東京医学校（現東大医学部）教師となり、1905（明治38）年まで日本に住んだドイツ人エルヴィン・フォン・ベルツ（1849-1913）は、東京でも場所によって娘の種類が違っていると書いている。

花見で九段に行けば非常に美しい高尚な気高い娘が見られ、上野ではまだ綺麗な娘がいるが、浅草から向島に行くと娘の種がすっかり落ち、下卑ている、というのである（白幡、2000）。

山谷、ホームレス

奥州街道、日光街道一つ目の宿場である千住宿の手前に当たる山谷は、江戸時代から木賃宿が集まっていたが、明治になると政策的に木賃宿街が形成され、人力車曳きなど、貧困層が住む地域となっていた。

戦後、東京都により被災者用テント村が設置され、これが簡易宿泊施設へ変わっていった。経済高度成長期には、全国から労働者が集まり、ドヤと呼ばれる簡易宿泊所に宿泊し、手配師によって土木工事現場での日雇い仕事に送られていった。こうして山谷は大阪の釜ヶ崎とともに日本有数の寄せ場となり、1961（昭和36）年には簡易旅館が約300軒、労働者約2万人が暮らす街となった。

山谷玉姫町は東京の三大貧民窟といわれ、暴動、争議なども絶えなかったが、その後地元の要望があり、1966（昭和41）年に山谷町が清川と改名され、山谷の町名は消滅している。

山谷ドヤ街は、高度成長期、バブル期など、好

況期には労働力として重宝されるが、不況期には真っ先に切り捨てられる景気の調整弁として利用されてきた。現在も166施設に5,000人ほどが暮らすが、仕事も無く、高齢化も進み、7割が60歳以上、8割が生活保護で、家族、親族との縁が切れた人も多い、東京最大のドヤ街となっている。

また、隅田川に面する隅田公園も、上野公園と並び、東京におけるホームレスの大野宿地となっている。

第7章 異界、他界との境界・浅草

I. 寺院

未開地最前線

寛永江戸図では、寺地は下町地域の周辺部に、町地を取り囲むような形で、ある程度まとまって分布している。明暦大火後は、町地の拡大とともにさらに外に出され、下谷、浅草などに寺町が形成された。

城下町で周縁部に寺地、寺町が配置されるのは、軍事的理由もあるが、鈴木昌雄によれば、実は江戸の寺地、寺町は、海に向かう埋立地の最前線、江戸から外に向かう街道沿いの町地の外側、つまり低湿地、荒地地といった地理的条件の良くない、開発最前線に立地している。

すなわちまずは土地を造成して寺を建立し、周囲に寺町ができ、町地となっていくと、寺をさらに周縁部へと移動している。こうした寺は、布教の根拠地であると同時に、都市開発の最前線であり、外の未開地との境界的空間、最前線と位置付けられていたというのである（鈴木、1959）。

浅草寺

東京都内最古の寺である浅草寺の場合も同様である。浅草寺は推古天皇の時、漢人の系譜を引くひのくまのはまなり 檜前浜成、たけなり 竹成兄弟が聖観世音菩薩像を綱にかけ、その後出家して、自宅を寺としたことに始まり（竹内、2010）、645（大化元）年、勝海上人が観音堂を建立し、夢告により本尊を秘仏と定めた。

以後東京湾の一漁村にすぎなかった浅草が、参拝者が増えるにつれて寺を中心に発展してきたの

である（浅草寺、2012）。

浅草寺は寺であり、墓を持ち、他界に通じる空間であるが、さらに浅草寺境内は、救済空間とも考えられた。そのため、行き倒れ、捨て子、自殺が多く、実際行き倒れ人は寺が医者に診せたのである（竹内、2000）。

II. 川

他界

江戸の都市空間は大川、今日の隅田川を境の川として、城と城下町のある西岸は現実の、光の都市空間、対岸の東岸は他界、闇の都市空間と認識されていた（栗本、1984）。

それゆえ両国橋を渡った東岸に、無縁仏を祭る回向院が建立されたし（桜井、2000）、両国橋のたもとでは大山阿夫利神社への参詣に向かう前の水垢離が取られたのである。

実際隅田川は、見物人が船で押しかけるほど、身投げ、心中が絶えなかった（秋山、1999）。夢野久作も、幅ひろく、寂しく、淀みなく流れる水を見ると、吸い込まれるような気持ちになる者が多いと書いており（夢野、1979）。落語でも身投げというと浅草と川向こうの本所を結ぶ吾妻橋で、吾妻橋は身投げに似合っているなどといわれた（佐藤、1988）。1948（昭和23）年浅草生まれの扇師荒井修も、年に2回くらいは土左衛門を見たという（なぎら、2000）。

また、隅田川は昔から墮胎児、生まれてから殺した子、捨て子が捨てられるところでもあったし（夢野、1979）、関東大震災、戦災では多くの犠牲者の死体が流れ、今日でも供養のために、川施餓鬼が行われている（読売新聞社社会部、1992）。

水辺異界

荒川、隅田川の水辺は異界との境界的空間と考えられており、七不思議などが集中していた。

例えば隅田川の鐘ヶ淵には、関東支配を進める小田原北条氏が、軍門に下った千葉氏からの戦利品として持ち帰ろうとした瑞応寺の鐘が沈んでいるという。鐘を船に載せ隅田川を進んだところ、鐘から女性のむせび泣きのような不思議な音が響

き、やがて強い唸りに変わり、唸りにつれて船が転覆しそうな凄まじい風雨と波が荒れ狂った。夕顔姫の亡霊が憑いているのだと恐れをなした武将らは、鐘を川底へ沈めて難を逃れた、というのである。

徳川吉宗はこの鐘を引き揚げよう命じ、潜りの名人が娘数百人分の髪の毛で作った毛綱で引き揚げようとしたが、河童に邪魔され、竜頭が水面を離れようとする時に毛綱が切れ、沈んでしまった。沈んだ鐘は明治初めころまで水のきれいな日には見えたという（田中、1999）。

河童

波乗福河童大明神を祀る曹洞宗巨嶽山曹源寺は、「かっぱ寺」と呼ばれる。この寺には、1814（文化11）年、合羽屋喜八が葬られた。喜八は、水はけが悪くて困っている住民を助けようと、新堀川（現在の合羽橋道具街通り）の水はけ工事に私財を投じて尽力したが、これに感動した隅田川の河童が手伝ったといわれ、その後河童を見かけると良い事があるといううわさが広まり、かっぱ寺と呼ばれようになったという。

III. 人外境

四谷怪談

『四谷怪談』のドラマは、鬼門の方向の聖俗混在の不安定な街浅草を起点に、江戸外縁に沿い、左回りに進行し、江戸都市計画によるのの字の渦巻の二巻き目から内側には入らない（杉浦、1992）。

江戸川乱歩

日本の探偵小説の祖江戸川乱歩の作品では、池袋、新宿、渋谷の線が周縁で、西新宿は場末、中野は田舎として描かれているが、隅田川以東となると、杉並西部同様、東京市の尽きる人外境で、半獣半人のアジトが草ぼうぼうの中に存在するような、通常のいかなる倫理も及ばぬことが起こり得る魑魅魍魎の空間として描かれている（富田、1997）。

乱歩にとって浅草は東京一の迷路であり、ミステリーを生み出す格好の舞台と考え、闇、退廃、

呪い、生首、血、娼婦、裸女といった冥府へのキーワードを駆使し、殺人事件を発生させ、人間豹まで出沒させている（富田、1997）。

IV. 異界としての吉原

異国

吉原は、太田南畝の『北里花樹歌』、市川寛斎の『北里歌』などに記されている通り、江戸からは北に隔たった「北里」、さらには、「北州」、「アリンソ国」などと呼ばれた。さらに吉原では、廓言葉と呼ばれる「ありんす」に代表される独特な人工語が用いられていた（秋山、1999）。

また、一般の女性が吉原を歩いて良いのはお酉様の日だけで、普段は女性が歩くことのできない、江戸の街とはまったく異質な街、いわば異国だった（早乙女、1984）。

異時間

吉原は時間も江戸の街とは異なっていた。江戸初期、吉原で客を取るのは昼間だけだったが、昼と夜の生活に信仰的に明確な区別があった中世人には、昼夜逆転した白昼の売春は、きわめて異常な、いかがわしい行為だった（今西、2007）。

江戸街には町木戸があり、木戸番が時の鐘を聞いて拍子木を打って町内を回り、明け六ツと暮れ四ツに町木戸を開閉した。ところが吉原では、引け四ツという独特の制度があり、四ツという夜見世の時間制限を無視して、九ツにずらして拍子木を打っていた。また明け方に帰る客のために七ツにも引け四ツとして打った（田中、1995）。

さらに、当時の江戸の街では、夜間に町を明るくするために辻行灯や掛け行灯など屋外用の灯火を使用しているのは町人地だけで、大名や敷地、武家地、侍地ではほとんど屋外用の灯りらしい灯りはなく、きわめて暗かった。ところが「闇の夜も吉原ばかり 月夜かな」（基角）とうたわれたように、吉原だけは闇夜に浮かぶ光り輝ける島だったのである（浅野、1999）。

季節も江戸の街とは異なり人工的で、1743（寛保3）年からは、毎年3月朔日に仲の町ついたちの通りの中央に数千本の桜を植えた。下草に山吹を添え、

まわりを青竹の垣根で囲い、中には雪洞ほんぼりを立てて火を灯した。この桜は無論一定時間がたてば撤去されるわけで、吉原は江戸の街とは異なった、人工的時間が流れていたのである（中江、2000）。

また吉原の夜桜は物忌みであり、物忌みの日、江戸町人はケガレを祓う日として夫婦が性交を慎んだが、吉原では逆に紋日として客を盛んにとる日だった。吉原は江戸中の穢れを引き受ける地でもあったのだ（内藤、1996）。

吉原は江戸から見て、言葉も、時も異なる、まったく異なる秩序で動くまきに異界、異国だったのである。

おわりに

I. コスモスとカオスの力

自然への恐れとコスモス

人は動植物、気候、天候など、自然の環境の中で生きていかなければならない。しかし自然のままの環境は、人にとってはあまりに荒々しく、生きることを阻害し、説明、理解しがたい、恐るべき混沌の世界＝カオスである。人はこうした自然の支配するカオスの中で生きていくことはできない。

それゆえ人は、自然、カオスに対抗するために文化を作り出し、自然をコントロールしようとしてきた。動物、植物などをコントロールし、不可能なものは都市空間から排除しようとする。さらに自然を、科学などの文化によって説明、理解可能なものにしようとし、説明、理解不可能な超自然を鬼、怨霊などとして都市空間から排除しようとする。

こうして人は、都市空間の中で環境を、人が予測し、コントロールできる、説明、理解することが可能なものに作り変えてきた。こうした都市空間は、人にとって安全で、安心で、快適な空間、コスモスとなるのである。

内なる自然への恐れとコスモス

人は、自身が動物であり、本来は本能によって衝き動かされる自然の一部としての生き物である。

しかしそうした自然の一部のままであっては、自らが、また社会が、生きることを阻害され、都市は説明、理解しがたい、無秩序が支配する、混沌の空間＝カオスとなってしまう。

そこで人は、そうした自らの内なる自然を恐れ、嫌悪し、文化を作り出して、それによって自らの内なる自然をコントロールし、説明、理解しようとする。闘争本能はスポーツ、ゲームといった形で昇華させ、逸脱した場合は犯罪という「悪」のレッテルを貼りつけ、都市空間から排除する。性行動もまた、結婚という文化の中に囲い込み、逸脱した行動には「穢」というレッテルを貼りつけ、都市空間から排除する。

さらに、動物としての人が生きれば、必ず廃棄物、排泄物が発生するし、絶対的に不可避な自然である死によって、自らが死体となる。これにも「穢」というレッテルを貼りつけ、都市空間から排除しようとするのである。

このように、自らの内なる動物性を文化によってコントロールし、排除することによって、人は、自らを、そして他の人々、社会、都市空間を、安全、安心、説明、理解可能で快適なコスモスとすることを可能にするのである。

コスモスの脅威とカオス回帰

こうしてコスモスとして確保された都市空間で文化によって定められた通りに生活していけば、人は問題なく生きていくことができる。

ところが本来動物である人にとって、そうした生活は、ナマの自然から隔てられ、自らの内なる動物性が抑圧された状態であり、大きなストレスでもある。文化によって定められた通りに生活していくことは、当たり前の世界を作り出し、変化を遠ざけ、柔軟性を奪って、人々の創造力を枯渇させていくことでもある。こうした中では、動物としての人は、活力が減衰し、生命力が弱まってしまうのである。

都市も同様で、自然も人々の動物性も徹底的に排除し、コントロールし、計画された人工的な都市は、「穢」も「悪」もなくきれいで安全だが、反面、異質性、予期せざる変化、出会いを奪い、

逸脱者の存在を許さぬなど、画一的で、面白さ、魅力に欠けた都市となってしまう。そこに生活する人々も、柔軟な発想で、革新し、新しい文化を創造する力をなくしていく。つくば研究学園都市、ブラジリアのように、自殺者が異常に多いなどという問題まで発生する。

他方で、無計画で、自然が徹底的に排除されておらず、コントロールが少なく、自然発生的に拡大していった、迷路のような、異質性と逸脱者が溢れる自由な都市は、面白く、魅力があり、そこに生きる人々は活力を保ち、柔軟に、発想豊かに革新し、創造することが可能となる。

実際つくばの場合も、当初の人工的な都市空間に、計画を逸脱した、あるいは計画されなかった「穢」れた乱雑な飲み屋街などができるとともに、都市としての魅力、面白さが増し、自殺などの問題も軽減し、創造力、革新力ある文字通りの研究学園都市として、発展している。

このようにして人は、一面で動物、植物、そして自らの動物性などの自然を排除、コントロールすることを求めながら、他面でそれらへの回帰をも必要とするのであり、自らコントロール不能な、理解、説明不能な、カオスの世界にあこがれ、接近しようとする。それによって人は、自らの生命力を回復し、活力を取り戻すことができるからである。

II. 浅草というはずれの街の力

異質の出会いの力

こうした視点から浅草を見るなら、まず地理的には、江戸・東京という都市、さらには日本の秩序の中心たる江戸城、皇居、都心から物理的に隔たっている。そのため、文化によるコントロールの低い、いわゆる田舎との境界的空間である。

さらに海辺、水辺で、田園地帯に接しているため、自然に近接し、街道、舟運、鉄道と、江戸・東京の出入り口、交通の結節点として、絶え間なく異質の、多様な人、物、情報が流入し続けてきた。

これは、一面では、自然を排除、コントロールしたはずの都市空間の内外の境界を無化し、コス

モスを脅かすことである。しかし他方で、人々に、自然、異質の人々、物、情報と出会い、当たり前で満たされた日常性を破る異化効果によって、柔軟で豊かな発想を可能とし（廣末、1973）、自身と文化、都市を革新、活性化する力を与えてもくれる。

芋ようかんの場合も、高級和菓子という当たり前を逸脱して、さつまいもという田舎から流入してくる庶民的な食材で、これまでになかった和菓子を作り出すという創造、革新が可能になったのは、都市の中心の秩序に縛られない浅草というはずれの街で、舟運によりさつまいもが運び込まれる芋問屋と、和菓子職人という異質の人々が出会ったからなのである。

「悪」の力

浅草には、吉原遊郭、芝居町という悪所、遊女、役者という賤民が、都市の中心から「悪」として排除されてきた。近現代においても、ストリップ、低俗とされる芸能などが行われ吉原は遊郭、ソープランド街として存続している。

これは江戸・東京の都市空間をコスモスとして維持するために、浅草が、人々自身の動物的行動である性、暴力、逸脱行為などを排除すべき境界的空間とされたからである。

実際芝居は、『東海道四谷怪談』のお岩毒殺の場面に示されるように、陰惨で暴力的なもの、女以上に女性的な所作をする女形に象徴されるような性的なものも多く、こうしたコントロールされない自然のままの暴力的なもの、性的なものとは不可分な芝居には、コスモスを乱す秩序破壊的なものとして「悪」のレッテルを貼り付け、排除した先が浅草なのである。

遊郭の場合も、人という動物の性欲という本能をそのまま発現するものであり、これまたコスモスを乱す秩序破壊的なもの、すなわち「悪」として浅草に排除された。

しかし悪所では、排除の思惑とは裏腹に、文化の革新、創造が行われ、江戸・東京で一番の文化発信地となって、都市文化の中核を担うこととなった。これは、「悪」が、既成秩序を破壊、混乱さ

せ、カオスへと引き戻す猛々しい力を内在し、その力は、日常性を脱却、破壊して、革新し、新しい文化を創造するエネルギーをも秘めているゆえである。「悪」が排除されて来れば来るほど、文化がコントロールする都市という枠組みの中で、抑圧を感じている人々にとって、自由で、動物としての人の本来のエネルギーを発現しうる場となり、活性化と、文化の革新、創造へとつながっていったのである。

こうして、役者、遊女といった「悪」の力を肉体に潜める人々と出会うはずれの街浅草は、次々と革新、創造を可能にする街であり続けたのである。

「穢」の力

浅草はまた、犯罪者、死体、廃棄物、排泄物といった、動物としての人が生活していくと都市空間で必ず発生してしまう「穢」を排除し、それらを扱い差別の対象とされた人々をも中心から隔てる境界的空間ともされた。

こうした「穢」もまた、都市空間を汚く怖い、文化のコントロールからはずれたカオスに引き戻してしまう恐るべき存在であるため、強い力を内在していると考えられた。それゆえ、きれいで、計画的で、予測し、説明、理解可能な、文化によってコントロールされたコスモスとしての都市空間の中で、窒息し、活力を奪われている人々にとって、境界的空間浅草で、こうしたカオスの力に触れることは、当たり前の世界を脱し、柔軟で、革新、創造できる力、活力、生命力を取り戻すことになったのである。

異界、他界の力

隅田川の水辺も、汨橋も、他界との境界的空間であり、その先は死の空間、他界であった。水辺はまた河童などの魑魅魍魎が跋扈し、七不思議が語られる、異界との境界的空間だし、浅草寺もまた、聖なる場にふさわしい山という異界に通じる場である。吉原遊郭も、時から言葉まで異なり、価値逆転の異界であった。

こうした他界、異界は、文化によってコントロー

ルすることができず、説明、理解され得ないカオスの世界であり、コスモスを揺るがす恐るべき力、超自然力を秘めている。

江戸・東京の鬼門であり、他界、異界に近接する浅草は、生者の文化によってコントロールされた都市空間の中で、活力、生命力を枯渇させた人々が、こうした恐るべき他界、異界、超自然の力、カオスの力に触れることを可能にする空間であり、それゆえに、人々の革新力、創造力、活力、生命力を活性化させる盛り場として繁栄し続けることができたのである。

はずれ者、はずれの街の革新力、創造力

いつの時代も、文化の革新、創造は、中心ではなく、はずれから、しばしば「悪」、「穢」と結び付けられ、賤視、差別の対象とされる人々から始まる。

歌舞伎の場合も、創始者である出雲阿国は、都から遠く隔たった僻遠後進の地出雲の出身で、売春も業とする被差別階層である歩き巫女として非定住の生活を続けていた。その阿国が異人として都に上り、鴨の河原という自然、異界、他界と接する都市空間のはずれで出会ったのが、今日のヤンキーともいうべき歌舞伎者と呼ばれた異質な文化逸脱者たちである。そうした自由の場で、異質なはずれ者、異質な文化どうしが出会ってこそ、今日では日本を代表する伝統芸術となった歌舞伎は創造されたのである。

浅草という街は、中心からはずれ、「悪」、「穢」、被差別者が隔てられ、自然、異界、他界に近接した、まさに境界的空間、カオスに一番近い街であり、それゆえにこそ、人々を活性化し、革新力、創造力を発揮させ続けてきたのである。

人と世の中が見えるはずれの街

人は生きるために、カオスを生み出すものどもを排除し、コスモスを作り上げる。ところが、そうして生きるために排除したはずのカオスの危険な力を、生きるために不可欠のものとして利用もする。はずれの街浅草は、まさにこの双方の場となる街であり、この浅草という街は、人が、人の

世が、生きるということが、根源的に抱える矛盾を投影した、まさに人という生き物の生き方が立ち現れる街であるともいえるのだろう。

参考文献

- 會田隆昭, 2002, 「浅草紙の三百年——江戸＝東京北郊に於ける漉返紙業の歴史地理——」, 『百万塔』113号, 紙の博物館
- 秋山忠弥, 1999, 『江戸諷詠：文人たちの小さな旅』, 文藝春秋
- 朝日新聞社編, 1994, 『朝日日本歴史人物事典』, 朝日新聞社
- 朝日新聞社社会部, 1986, 『東京地名考』上, 朝日新聞社
- 朝日新聞社社会部, 1986, 『東京地名考』下, 朝日新聞社
- 浅野宏, 1999, 『江戸の「闇」を読む』, NTT出版
- 江波戸昭, 1997, 『東京の地域研究：続』, 大明堂
- 藤田覚編, 2003, 『街道の起点』, 吉川弘文館
- 廣末保, 1973, 『辺界の悪所』, 平凡社
- 今西一, 2007, 『遊女の社会史』, 有志舎
- 陣内秀信編, 1993, 『水の東京』 ビジュアルブック江戸東京(5), 岩波書店
- 陣内秀信, 2003, 松本こーせい編『なぞのスポット 東京不思議発見』, 山海堂
- かのう書房編, 1989, 『隅田川の歴史』, かのう書房
- 貴田荘, 2003, 『小津安二郎をたどる東京・鎌倉散歩』, 青春出版社
- 小林文美, 1987, 「弾左衛門」, 『江戸東京学事典』, 三省堂
- 児玉幸太監修, 2002, 『東京都の地名』, 平凡社
- 今和次郎, 2001, 『新版大東京案内』下, 筑摩書房
- 栗本慎一郎, 1984, 『都市は、発狂する。そして、ヒトはどこに行くのか』, 光文社
- 松葉一清, 1988, 『帝都復興せり：建築の東京を歩く』, 平凡社
- 港区みなと図書館, 1981, 『写された港区』, 港区
- 宮川章, 2008, 「ニッポンはじめて物語 第111 オペラ」, 『Signature』2008年3月号, 日本ダイナースクラブ
- 宮元健次, 2001, 『江戸の陰陽師 天海のランドスケープデザイン』, 人文書院
- 武蔵義弘, 2004, 『知られざる東京の史跡を探る』, 鳥影社
- なぎら健壺, 2000, 『東京の江戸を遊ぶ』, 筑摩書房
- 内藤正敏, 1996, 『魔都江戸の都市計画』, 洋泉社
- 中江克巳, 2000, 『江戸の遊び方：若旦那に学ぶ現代人の知恵』, 光文社
- 中尾健次, 1996, 『江戸の弾左衛門：被差別民衆に君臨した“頭”』, 三一書房

- 尾河直太郎, 2000,『史跡でつづる東京の歴史』下, 一声社
- 小木新造他編, 1987,『江戸東京学事典』, 三省堂
- 小木新造, 1991,『江戸東京を読む』, 筑摩書房
- 岡野友彦, 1999,『家康はなぜ江戸を選んだか』, 教育出版
- 沖浦和光, 2006,『「悪所」の民俗誌——色町・芝居町のトポロジー』, 文藝春秋
- 大石学, 2003,『駅名で読む江戸・東京』, PHP 研究所
- 桜井進, 2000,『江戸のノイズ: 監獄都市の光と闇』, 日本放送出版協会
- 早乙女貢, 1984,『江戸を歩く』, 平凡社
- 佐藤光房, 1988,『東京落語地図』, 朝日新聞社
- エドワード・サイデンステッカー, 1986,『東京下町山の手: 1867-1923』, ティービーエス・ブリタニカ
- 白幡洋三郎, 2000,『花見と桜〈日本的なるもの再考〉』, PHP 研究所
- 杉浦芳夫, 1992,『文学の中の地理空間』, 古今書院
- 鈴木昌雄, 1959,「初期の江戸における町の変遷と寺院移転」,『封建都市の諸問題』, 地方史研究協議会
- 鈴木理生, 1989,『江戸の川・東京の川』, 井上書院
- 鈴木理生, 2006,『江戸の橋』, 三省堂
- 台東区教育委員会社会教育課編, 1979,『古老がつづる台東区の明治・大正・昭和』, 台東区教育委員会社会教育課
- 台東区区史編纂専門委員会, 1997,『ビジュアル台東区史』, 台東区
- 竹内誠, 2000,『江戸の盛り場・考——浅草・両国の聖と俗』江戸東京ライブラリー 11, 教育出版
- 竹内誠, 2010,『東京都の歴史』第2版, 山川出版社
- 田中聡, 1999,『伝説探訪東京妖怪地図』, 祥伝社
- 田中優子, 中川真, 1995,「中国で江戸, ジャワで平安京の音に出会う」,『東京人』, 90号, 東京都文化振興会
- 手島宗太郎, 1995,『江戸・東京百名山を行く: 都会の中に深山の趣』, 日本テレビ放送網
- 寺田寅彦, 1997,「浅草紙」,『寺田寅彦全集』第四巻, 岩波書店
- 富田均, 1997,『乱歩「東京地図」』, 作品社
- 上田篤, 1996,『日本の都市は海からつくられた: 海辺聖標の考察』, 中央公論社
- 上田正昭他編, 2001,『日本人名大辞典』, 講談社
- 読売新聞社社会部, 1992,『東京湾水辺の物語』, 読売新聞社
- 夢野久作, 1979,「街頭から見た新東京の裏面」,『東京人の墮落時代』, 葦書房

博物館企画展示

- 江戸東京たてもの園, 2002,「東京建築展——住まいの軌跡/都市の奇跡——」

- FUJIFILM SQUARE, 2012,「写真歴史博物館」
- 民音音楽博物館, 2012,「浅草オペラの時代」展

メディア

- 朝日新聞, 1967年12月14日
- 朝日新聞, 2009年1月10日
- NHK 総合テレビ, 1999年9月28日,『ときめき歴史館』,「江戸の町娘おしゅれ革命」
- NHK 総合テレビ, 2012年9月26日,『歴史秘話ヒストリア』,「タワーに願いを〜華麗なるニッポンの塔1400年の旅〜」

ホームページ, ブログ

- あさくさかんのん浅草寺ホームページ, 2012, <http://www.senso-ji.jp/>
- 浅草サンバカーニバル実行委員会ホームページ, 2012, <http://www.asakusa-samba.jp/top.htm>
- 2012
- 舟和本店ホームページ, 2012, <http://funawa.jp/>
- 2012
- 浄閑寺ホームページ, 2012, <http://www.jyokanji.com/profile2.htm>
- かっぱ橋道具街ホームページ, 2012, <http://www.kappabashi.or.jp/home/aisatu.html>
- まちみらい千代田, 2012, 江戸・東京人物辞典, <http://www.chiyoda-days.jp/edo/person/index.html>
- 仲見世商店街ホームページ, 2012, <http://www.asakusa-nakamise.jp/about/index.html>
- おいもやさん興伸ホームページ, 2012, <http://www.oimoyasan.com/>
- 大江戸八百八町ホームページ, 2012, <http://members2.jcom.home.ne.jp/matuti/>
- 離婚式オフィシャルサイト, 2012, <http://www.rikonshiki.com/>
- 西条昇, 2012,『お笑いエンタメ人生!』ブログ, <http://saijo-noboru.blog.so-net.ne.jp/2012-08-07>
- 東京下水道史探訪会, 2012,「東京のし尿処理の変遷」, 日本下水文化研究会ホームページ, <http://sin-yoken.sakura.ne.jp/caffee/catokyos.htm>

謝辞

本稿は, 江戸川大学駒木祭「いとうせいこうさんとたどる現代浅草学入門」(2012年11月2日), 鉄道アイドル「ステーション♪出発進行!ライブ」(11月3日)における講演に加筆したものである。

作家, お笑い評論家, 鉄道アイドルと文化人類学者という「異質」の出会いの場を提供してくださった, いとうせいこう氏, 西條昇氏, 「ステーション♪」のみなさん, 親泊素子学科長, 恵小百合教授, 濱田逸郎教授, 林香織講師, 駒木会他大学関係者に, 紙上を借りてお礼を申し上げます。